ICT教育を加速

学び舎の新たなステージ

大津ヶ丘第一小学校の事例

柏市GIGAスクール構想は、市内学校の大半が概ねステップ0から1と初期段階にあるようだ。「柏市学校教育情報化有識者会議」において指摘され、学校間格差への言及もあった。普及しない背景には、従来型の教育への信用が高く、実績のない新しい教育への転換に対する負担感が大きいためだ。では果たして、ICT教育の推進に意味はあるのか。市内推進校の大津ヶ丘第一小学校を取材し、その意義を探した。

大津ヶ丘第一小学校（佐和伸明校長、児童314人）では、今年度から高学年の一部クラスで、教科別に授業をクラウド管理している。グーグルスプレッドシート（アプリ）を使い、教師と児童が学習内容や結果を授業の進捗に応じて共有するものだ。

教師は学習計画を事前に提示し、該当する教科書のページ数や情報サイト、動画のURLをシートに書き込む。児童は同計画に基づき、単元別の学習目標を設定し、クラスの席次を自由に調整できる。

授業は冒頭10分程度で、教師から単元の基礎が伝えられ、問題が出題される。児童らは設定した席次で、仲間と意見を交わし、ウェブ上を探索し、教師に聞くなどして、それぞれのルートで回答を導き出していく。

授業の進捗もまた、各自が設定した目標によって様々だ。教師が出題ごとに評価するチェックポイントがあり、クリアした児童は先に進み、理解の早い児童は数コマ先の授業内容に及ぶこともある。チェックポイントで教師が理解度を測り、学びの躓きがないようフォローする。

児童は授業を終える段階で、振り返りと学習成果の自己評価を入力。教師がコメント（評価）し、授業は終わる。児童の学びの進捗を教師がクラウド上で視覚的に認識でき、「児童が取り残される可能性は低い」と佐和校長は説明する。

児童が各々のペースで学び、教えあう姿も

学びの個別最適化

本紙は今月5日、当該授業を行う6年1組を取材した。席を見渡すと、1人で黙々と問題を解く児童、2人で意見を交わす姿、タブレットで関連情報や動画を探すなど、十人十色だった。

また、授業の進捗（児童別の理解度）がスプレッドシートで共有されているため、苦手科目を持つ児童が進んでいる児童に助言を求め、逆に苦手とする児童をフォローする姿もあった。解説動画を作る児童もいて、それぞれのペースと方法で学習に専念していた。教師もまた、児童の進捗をクラウド上でつぶさに確認し、ときに距離を置き、寄り添っていた。

授業についてある児童は「自分の得意な方法で学べるのは楽しい。それを友達に伝えられるとうれしくもなる。勉強する意欲が湧く」と話した。一見自由だが、授業を放り出す児童はみられなかった。

担任の小林郁和教諭は、「単元前にスプレッドシートに授業内容を書き込むため、事前準備は増えた」と話す一方、「これまで分散させていた準備をまとめた印象で、負担増とは捉えていない」とした。

授業の手応えについては、「子どもたちが授業時間中、頭をフル回転させているのがわかる。スプレッドシートで子どもの理解度が明確に伝わってくるので、個別にどの程度フォローすればいいかわかりやすい」と話した。総じて、「やってみて指導で困ったことはほとんどない」とした。

学力への影響

佐和校長によると、授業参観における保護者の反応は上々という。児童と教師へのアンケートでも「学び易さ」「教え易さ」への反応がもっとも高い。令和6年度全国学力・学習調査の自動質問紙調査では、6年生の「地域や社会をよくするために何かしたいと思うか」「人の役に立つ人間になりたいか」「将来の夢や希望を持っているか」といった質問の肯定的回答は、いずれも全国平均、千葉県平均を大きく上回り、「新しい学びをはじめて、自己肯定感が増していると言える」と佐和校長。同校ではほかにも、地元の地域課題解決に向けた取り組み「ふるさとPR大作戦」を実施しており、佐和校長は「地域課題の抽出や解決策の模索はすべて児童による。非認知能力の向上も感じている」と話す。【関連記事4面】

同校の挑戦は、グーグル社や長万部町教育委員会が視察に訪れ、注目されている。ただ佐和校長はICT推進について、「認知能力向上も示さねば受け入れてもらえない」と指摘。今後予定される学力テストの成績をひとつの試金石と捉えた。